



Title	『ヴェル・サクルム』の書物芸術について：美術雑誌における挿絵と技法の考察
Author(s)	谷本, 尚子
Citation	デザイン理論. 1995, 34, p. 134-135
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/52872">https://doi.org/10.18910/52872</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 『ヴェル・サクルム』の書物芸術について ～美術雑誌における挿絵と技法の考察～ 谷本尚子／京都精華大学（非常勤）

### ○はじめに

W. モリスに始まる「愛書家の為の書物芸術」の気運は、複数生産されるイメージへの芸術家の直接的な関与の必要性を一般に浸透させた。やがて機械印刷技術の著しい発展を背景に、芸術家による活字デザインの革新とそれに伴う白黒のグラフィックへの嗜好が民主的な新しい芸術のあり方としてもはやされるようになる。ここには写真製版に触発された線の復興と手工芸的な試行錯誤が見いだせる。これらの写真製版による挿し絵や装飾は、写真製版による挿し絵が流行していた当時、ウィーン・セセッションの個性を最も良く代弁していたように思われる。セセッションの機関誌には、広報機能以外に総合芸術を目指す造形活動を視覚的に印象付ける機能が求められた。この研究報告ではこうした性格を持つ『ヴェル・サクルム』について、掲載される挿し絵の装飾的或いは印刷芸術の視点から考察を進めたいと思う。

### ○美術雑誌『ヴェル・サクルム』

オーストリア美術家協会の正式な機関誌として1898年1月よりほぼ毎月出版されたこの雑誌は、最初1冊2クロネ（約1.67マルク）年間購読すると11冊で12クロネ（約10マルク）で販売された。同時代の大衆的な芸術週刊誌『ユージェント』の年間購読料が12マルク（1冊0.3マルク、ASSIM というタバコの1箱と同じ値段）であり、かなり意識的に低価格を目指していたと思われる。また『ヴェル・サクルム』の為に制作されたスケッチや挿し絵は6年間で471点にのぼり、さ

らに271点のオリジナル版画が付け加えられた。本文を組む活字はW. モリスのゴールデン・タイプを基につくられ、二度に渡り印刷所を替えながら印刷面の色や構成の様々な試みが行われている。経済的な制約に対して丁寧な仕事と低価格を両立する為、1900年以降はオーストリア芸術家委員同盟の自費出版の形式を取り、セセッションの会員だけを対象に販売される事となる。

本文ページの構成デザインは特集内容や刊行ごとに大きく変化し、写真印刷やカラー印刷などの実験的な試みと共に『ヴェル・サクルム』を特徴づけている。

当時、大衆社会との関連のうちに総合的な新しい芸術を模索していた様々な芸術の動向は、情報誌として或いは書物芸術として様々な美術雑誌を刊行していた。フランスの『ルヴュ・ブランシュ』、イギリスの『ザ・ステューディオ』、ドイツの『パン』や『ユージェント』等は、きわめて民主的な雑誌として愛好されたと同時に書物芸術として美しい表紙や豊かな挿し絵で彩られていた。『ヴェル・サクルム』はこうした諸々の雑誌に比べて少し遅れて始められた。

### ○挿し絵を巡る状況について

始めに取り上げたように全体芸術としての書物芸術の試みはイギリスのアーツ・アンド・クラフツに先行されていた。額縁入りのファイン・アートに対する民主的な手工芸として、W. モリスは白黒の線描による挿し絵とイルミネーションと美的な書体を復活させたのである。W. モリスの最初の書物芸術へ

の試みは、印刷媒体への芸術家による直接的な関与を促したのであるが、非常な手間と技術が芸術家本人に課せられた。版画作品とも呼べるこうした印刷に対して、写真製版の技術は精密に原画を再生する役割を職人の手から工学技術に置き換え、作家のイメージを媒体へ直接載せる事が簡単となった。

当時流行していた白黒の線描画の挿し絵は、写真映像が絵画に与えたものと同じ質の影響からもたらされた。写真が得意とする繊細で緻密なトーンの再現は、伝統的に求められていた描写の究極を現実にしたものである。これに対して革新的な芸術家達は素朴な力強さや民主的な健全さを明快な線や色彩に求めたのである。W. クレインは、彼の著書『書物と装飾』の中でこうした観点から、伝統的な「写实的＝自然の模倣」である挿し絵を過去のものとし、現代の挿し絵は「装飾的＝創造的」である必要を説く。

### ○『ヴェル・サクルム』の挿し絵

写真製版技術の導入により挿し絵を巡る状況が一変した世紀転換期のウィーンでは、テキストに付随し、図解するだけの挿し絵は過去のものであった。しかしセセッションの絵画のグループに影響を受けた象徴主義的、絵画的な傾向は引き続き見られた。挿し絵は象徴的な装飾によって取り囲まれ、描き出される情景の幻影性に付いて十分に説明的な構図を取り、絵画的舞台装置＝縁取りによってアレゴリーを作っていた。

インキュナブラの時代から見られる象徴的な挿し絵の伝統は、タイトル・ページの寓意的なモチーフに始まる。『ヴェル・サクル

ム』に用いられたタイトル・ページでは工芸的な高い装飾性が認められ、且つそのデザインは本文ページへも展開されていく。絵画的な挿し絵はテキストや本装飾と有機的な関係性を示し、またテキストを装飾する写真や挿し絵が同じ平面で構成されるなど表現手法も様々に工夫されている。

後半『ヴェル・サクルム』の本装飾がセセッション特有の様式化されたモチーフを展開していくのと並行し、挿し絵にも色彩を含む様式化された独特のフォルムを持つ平面的な表現が現れる。平坦な形態や装飾的な線描が、現実的な視覚の厳密な再生の代わりに用いられた。挿し絵や本装飾は平面の空間的な幻想を象徴し、過去の因習からイメージを解き放つ。イメージは再生されるものから表現されるものへと変わっていくのである。『ヴェル・サクルム』に印刷されたイメージは、作品紹介に至るまで色彩による装飾効果を加えられていた。平坦な色彩、繊細な線、網版による階調、それぞれが挿し絵の装飾性と結びつき、写真製版による視覚的效果として『ヴェル・サクルム』を特徴づけたと考えられる。

### ○おわりに

挿し絵に試みられた線的装飾と色面による装飾的な効果は、ウィーン・セセッション特有の工芸的質感を表現していた。すなわち『ヴェル・サクルム』は美術情報雑誌として伝達の機能よりも工芸性＝美的機能をより強く求めたと考えられる。さらに印刷技法や視覚効果の実験が行われ続ける事により、専門家を対象とした芸術運動の機関誌としての役割を果たしたのであろう。